様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０３８５

研究課題名（和文）「マイナー文学」における「私」の比較研究－カフカ、Ｒ・ヴァルザーと日本の私小説

研究課題名（英文）A Comparative Study on the "I" in the Literature of Kafka, R. Walser and the Japanese "I" novels

研究代表者
古川　昌文（Furukawa, Masafumi）

広島大学・文学研究科・助教

研究者番号：６０２６３６４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではフランツ・カフカとローベルト・ヴァルザー及び日本の私小説を「私」の表れ方という観点から比較し、それらの特徴を明らかにすることが試みられた。これらの文学作品には、作家自身の経験が強く反映される一方で、政治や社会の背景がほとんど排除されるという特徴がある。この特徴は作家相互の影響関係によるものではなく、いずれもがメジャーな西洋文学の伝統から距離から置いたところに成立した文学であることから生じている。各文学が置かれた周縁的性格が大きな物語よりも「私」の真実性という「小さな文学」（カフカ）を生じさせたのである。このことは支配的な西洋文学の伝統に風穴を開けることとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study of comparative literature the state of the "I" in the works of Franz Kafka is compared with that of a Swiss novelist Robert Walser and Japanese "I novels". These novels have a characteristic in common that the experiences of the authors are strongly reflected in the works, meanwhile political or social problems are thoroughly excluded. The characteristic does not come from their mutual influences but chiefly from the historical, cultural or personal fact that these works were produced in the peripheries which were away from the major tradition of European modern literature. The peripheral position of these writers let them approach "small literature" (Kafka) which concentrate on the truth of self-experiences, and it breathed new life into the the dominant tradition of modern literature.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：カフカ　ローベルト・ヴァルザー　マイナー文学　私小説

１．研究開始当初の背景
ローベルト・ヴァルザー（以下ヴァルザーと記載）とフランツ・カフカ（以下のカフカと記載）、カフカと日本文学それぞれの比較研究はかねてよりなされてきたが、両比較研究はまったく別個に行われてきた。両者を俯瞰する視点がないためである。本研究は、これらの文学がいずれも作家自身の経験を強く反映した作品であるという共通性に着眼し、その共通性には偶然以上の理由があるという推測の下、その理由を探るべく企図されたものである。

(1) ヴァルザーとカフカ
カフカがヴァルザーを愛読していたという事実から、カフカの文学がヴァルザーの影響を受けていることがしばしば指摘されてきたが、多くは表面的な指摘に止まっている。影響関係以外の、両者の資質や外的状況の異同といった様々な角度からの両者の比較分析が必要な状態である。

(2) ヴァルザー／カフカと日本の私小説
日本の私小説は従来西洋の自然主義の影響が強いとされ、それは事実ではあるが、作家自身の実生活と強く結びついた小説形態であることを考えると、自然主義とは別の観点からも西洋文学との比較をすることが必要だと思われる。作品に作家自身の経験が表現されていると見なすことのできるヴァルザー、カフカの文学と私小説との比較研究は未開拓であり、興味深い研究テーマである。

２．研究の目的
カフカが日記に書いた「小さな文学」という言葉をヒントに得られた「マイナー文学」という概念をキーワードとして、ヴァルザー（スイス）、カフカ（チェコ）及び日本の私小説における「私」表出の様態を比較する。この比較を通して、様々な意味で辺境に位置すると考えられる地域や個人において「私」が文学的にどのように表出されているか、またそのことはどのような文学史的意義を持つかを明らかにすることが本研究の目的である。

３．研究の方法
(1) 研究の枠組の整理。複数作家の比較研究という性格上、広い範囲から文献を集め、本研究の目的に沿って分類整理していく。また、「マイナー文学」を暫定的に「西洋の諸大国の本流から外れた小国民、小民族、小グループの中から生まれる文学」、「私」を「作品に表現される作家の自己表象」と定義するが、研究の進展の中でこれらのキーワードの内包・外延を精緻化していく。さらに研究対象の一つである「私小説」は必ずしも一般的な定義が存在しているわけではなく、従来の議論を検討することによって適切に分類・整理していく。そのため、関係する文学作品だけでなく二次文献の様々な言説を分析し、研究期間終了後も研究を発展させていけるような概念の一般化を図る。

(2) ヴァルザーとカフカの比較。ヴァルザーには詩作品も少なくないが、本研究では対象を散文作品に絞る。両者の比較研究では影響関係の有無が従来論じられてきたが、もとより影響関係を正確に画定するのは困難であるから、確実に影響関係にあるものとそうでないものを分け、後者については影響関係を度外視して、両作家の作品における「私」表出の同質性や質的差異を明らかにすることに重点をおく。

(3) 上記二作家の作品と私小説との比較。日本の私小説に関する言説は非常に多く、それらを分類・整理しつつ、自然主義をはじめとする西洋の文学潮流とどういう関係にあるかを再考する。そして自然主義とは到底言えないヴァルザーとカフカを、自然主義の影響下に成立したとされる日本の私小説群と比較することが可能なのかどうかを含め、歴史的・地理的文脈の異なるこれらの文学の同質性、異質性を明らかにしていく。

４．研究成果
以下、6 点に分けて記載する。これらの成果については一部を除き未発表であり、順次論文等の形で発表される。

(1)「マイナー文学」における「私」という観点からヴァルザー、カフカ及び私小説に関連する文献データを分類・整理し、今後の研究でさらに拡充可能な枠組を構築してきた。具体的には、上記の対象作品に関する従来の研究文献を伝記的、社会的（歴史的）、精神分析学的性格の強さによって分類し、それぞれが強く関連する作品とのリンク付けを行った。これにより、ある特定作品がどの程度論じられているか、どのような観点から論じられる傾向が強いか等を知ることができ、研究状況を俯瞰する上で有用である。たとえばヴァルザーのカフカに対する影響を強調する文献が減少するのと平行してヴァルザーの研究文献自体は増えていることから、ヴァルザーが「カフカに影響を与えた作家」という二次的な位置づけから、ヴァルザー文学の独自性を積極的に評価する傾向が強くなってきたことが推測できる。もとより文献は膨大である上に増え続けていくから作業の性格上終わりはないが、それぞれの時点で有益である。

(2) 研究開始当初、暫定的だった「マイナー文学」の定義を、ドゥルーズ／ガタリの研究を参照して「マイナー集団に属する作家がメジャー集団の文学制度に従って文学を書くこと」とすることにより、日本の私小説を西洋の写実主義（特に自然主義）という文学制

度に従って書かれた文学として再検討した。これにより、異文化の制度を導入することによって生じる元制度の変形という、より一般性のある政治的・社会的問題との接続が可能となった。

(3) ヴァルザーとカフカの比較研究では、まず前者から後者への影響関係を検討した。従来の研究では、ヴァルザーの影響はカフカの初期作品に限られるとするものと後期作品まで及ぶとするものがある。検討の結果、狭義の影響という意味では、カフカ文学の初期から後期に至るまで、ヴァルザーの影響と言えるものはごく一部に止まることが分かった。カフカ最初期の散文作品にはヴァルザーとの類似が認められはするが（とりわけカフカ『ある戦いの記述』）、影響と断定することは文体的にも内容的にもできなかった。両作家の類似性は、既に少なからぬ研究者が指摘しているように、資質的な類似もしくは同時代性から来る必然的な類似がない交ぜになったものと考える方がよいと思われる。また、カフカがヴァルザーを愛読していたという事実は、直接的影響としてカフカ作品に反映されているのではなく、自己の非ドラマティックな日常経験を文学化することが可能であるという創作への自信をヴァルザー文学がカフカに与えたことを示すに止まるだろう。その意味で、ヴァルザーのカフカに対する影響は間接的かつ限定的であると言える。

(4) ヴァルザーとカフカの文学における「私」の表出様態についての比較では次のような結果を得た。ヴァルザーの散文作品では一人称形式であれ三人称形式であれ、作家自身の経験世界がいわば距離を置いた場所から望遠鏡で拡大して見るように描写される。そのため、経験を取り巻く社会状況や歴史的背景は描写対象から排除され、経験が直接的に描かれることとなり、そこから生じる過剰な生々しさが却って非現実感を与える。こういう文学的効果をおそらくカフカはヴァルザーから知り、創作の契機としたと思われる。カフカもまた、社会状況や歴史的背景を排除して経験世界を描くという方法をとるところから創作を開始しているからである。しかしカフカの場合、ヴァルザーとの類似が指摘される最初期の作品『ある戦いの記述』において既に、経験を外的視点から描くのではなく、いったん内面化し現実性を取り去った上で作品化しようとしている。そのため登場人物や諸形象は現実の持つ輪郭や奥行きを失い、自他の区別すら曖昧になっていく。カフカはここからやがて作品内の人物や形象に奥行きを与える方法を獲得していくのだが、経験をいったん内面化する（理性的判断を取り払って事柄自体に語らせる）という基本姿勢は後期に至るまで貫徹している。

(5) 「マイナー文学」という観点からヴァルザーとカフカをみた時、両者に共通する一見非政治的・非社会的な特徴が反転し、西洋文学の制度に対するアンチテーゼという政治的側面が浮かびあがることを明らかにしてきた。マルティン・ヴァルザー（本研究が対象とするローベルト・ヴァルザーとは別人）がヴァルザーを「ケルト的」と評したように、描く対象を自己の経験世界に限定し、社会的次元を捨象するヴァルザー文学のある意味で近視眼的な性格は古代的であるとも言え、そのことが進歩性や社会批判性が要請される同時代において逆説的に「新しさ」を持った。これはスイスの貧しい家庭に育ち、教育にも文学的環境にも恵まれなかったヴァルザーが西洋文学の中心から離れたところで創作を始めねばならなかったことと無関係ではない。一方、カフカは高い教育を受けたエリートだが、その作品の多くはヴァルター・ベンヤミンが「太古的」と評する通り、やはり社会的次元を排除して書かれている。このことはプラハの非ドイツ人によるドイツ語文学というカフカ文学の周縁的性格、およびカフカがそのことを強く意識して創作を行ったことから来ていると考えられる。ヴァルザーとカフカは、外的状況は大きく異なるにもかかわらず、それぞれの周縁的性格が西洋文学の支配的制度から逸脱した「小さな文学」（カフカ）という質的共通性を作り出すこととなった。また、これらのことを明らかにする過程で、作品を「私」の表出に限定する両者の文学の受動的・女性的な性格も見えてきた。そうした性格をネガティブに評価する男性中心的な制度を解体する契機を両作家の文学は包含していると言える。とりわけカフカ最晩年の『歌姫ヨゼフィーネあるいはねずみ族』は、主人公が過剰なまでに「女性的」性格を持たされていることによって、間接的に「女性的」なるもの、さらには「ユダヤ的」なるものの無意味化が図られていると考えることができる。

(6) 日本の私小説（もしくは私小説的性格をもつ小説）をヴァルザー、カフカの文学と比較し、次のような成果を得てきた。私小説が西洋の自然主義の影響下に生まれたのに対して、ヴァルザー、カフカは自然主義とは離れた文学伝統の中にある。それにもかかわらず、これらの文学には歴史的・社会的諸問題を極力排除し、文学表現を自己の経験を表出することに限定したという点に意外な共通性を見出すことができる。この共通性は影響関係によるものではなく、支配的な文学制度の周縁（外部ではない）に位置することによって、制度自体が変形をこうむった結果であると見なすことができる。日本では、通常私小説に分類されるもの以外にも、夏目漱石、森鴎外、大江健三郎等多くの作家の作品に私小説と見なしうるものが少なくなく、私小説的性格は日本文学の大きな特徴の一つとさえいえることが分かってきた。西洋の文学伝

統から離れた日本で、しかし同時に西洋文学の強い影響下に成立した日本近代小説には、自己の経験を作品化することが最も「真実」に迫る方法であるという、西洋とはズレた方向で展開していったのである。これは戦後の日本文学においても継続していることが確認できる。たとえば私小説作家を自称した車谷長吉はカフカを不可解な自己の真実を探求する文学として受容し、カフカ文学の「内容」よりも「姿勢」を自分の文学姿勢とした。芥川賞作家小山田浩子は、カフカの内面化という執筆方法を自らの方法として取り入れたと考えられる。その際、大きな役割を果たしたのはカフカの作品だけでなく、カフカの執筆姿勢に関する二次的文献であったことが推測できる。これらの例が示すのは、カフカが日本文学に及ぼした影響には、安部公房に見られるような内容レベルの影響とは別に、カフカの文学に向かう姿勢（これについてはカフカに関する二次文献の言説の役割が大きい）というレベルの影響があるということである。私小説の場合、後者のタイプの影響が大きいのが特徴である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　2 件）
① 古川 昌文、小山田浩子のカフカ受容、広島独文学会、2014 年 3 月 22 日、広島大学（広島県東広島市）
② 古川 昌文、『歌姫ヨゼフィーネあるいはねずみの一族』について、カフカ研究会、2012 年 9 月 5 日、山の家風楽（大分県玖珠郡九重町）

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
研究代表者
古川 昌文（FURUKAWA, Masafumi）
広島大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：60263646